

エジプトの世界遺産ルクソールの古代遺跡と  
ともに生きる人々と地域

The World Cultural Heritage site in Luxor, Egypt,  
and its Living People and Community

---

河合 望  
Nozomu Kawai



## エジプトの世界遺産ルクソールの古代遺跡と ともに生きる人々と地域

河合 望

金沢大学新学術創成研究機構 准教授

nozomu.kawai@staff.kanazawa-u.ac.jp

### Abstract

The west bank of Luxor, Egypt, holds one of the most important and largest necropolis in Ancient Egypt. This area has been registered as UNESCO's world cultural heritage site, "Ancient Thebes and its Necropolis" due to its importance as the cultural heritage with universal outstanding value. This area is also known as Qurna Village where several generations of nearly 200 years had lived in or near the ancient tombs, which had been continuously robbed by the local people who lived there. Due to the continuous looting in the tombs within the World Cultural Heritage and problems of sewage and garbage by the local people there, the Egyptian government forced them remove from the area to the new village built to the north of the World Heritage site. During the relocation of villagers, their houses were severely demolished in order to revive the ancient landscape of the site. This resulted the damnation of the history of the villagers who were part of the history of the World Heritage Site. This paper discusses the history of the people of the village of Qurna on the west bank of Luxor, the change of the situation of the village after the registration of World Herigate site and the problem caused after relocation of the villagers.

**Key words:** World Cultural Heritage, Theban Necropolis, Qurna Villaga, Local people, tomb robbers

### 1. はじめに

エジプト南部の都市ルクソールは、古代にはテーベとして知られる宗教および政治の中心地であった(図1、2)。テーベの西岸には、「王家の谷」の名で知られる新王国時代の歴代の王墓地、数千基におよぶ当時の貴族の墓、王の葬祭殿などがあり、1979年の第3回ユネスコ世界遺産委員会で「古代都市テーベとその墓地遺跡(Ancient Thebes and its Necropolis)」として世界遺産に登録されている(図3)。ナポレオンのエジプト遠征以降、古代エジプトの遺跡や遺物が欧米人の関心の的となり、多くの貴重な古代の遺物が流出していった。テーベの西岸は、

古代エジプトの一大ネクロポリスであるが故に無尽蔵の古代の墓や遺物を擁しており、19世紀初頭以来この場所では古代の墓を住居として暮らす人々が増加し、クルナ村という集落が形成され、盗掘が繰り返されてきたのである。20世紀の中頃までに、クルナ村は古代の墓地全体を覆い尽くすまでになり(図4)、盗掘活動だけでなく、村民の生活排水やゴミが遺跡に悪影響を及ぼすことから、エジプト政府は遺跡内に生活する人々の移住を進めてきた。そして、1979年にテーベ西岸の墓地遺跡は世界遺産に登録され、その保存のために古代の景観の復元が推奨されるようになった。しかし、一方でクルナ村

は19世紀初頭からの文化や社会の伝統が約200年間続き、テーベ西岸の墓地遺跡の文化的景観の一部になっていたにも関わらず、上記の理由により2010年までにほとんどの住居が撤去され、人々も新しく建設された村への移住を余儀なくされた。これによって、岩山に穿たれた古代の墓のみの景観となり、およそ200年に渡るクルナ村の人々の歴史がほとんど抹殺されてしまったのである。

本稿では、ルクソール西岸の遺跡に暮らし続けたクルナ村の人々の歴史、世界遺産登録後の村の変遷、そして移住後の村人が抱える問題について解説し、世界遺産を抱える地域住民の問題について考察したい。

## 2. 世界遺産ルクソールの古代遺跡

古代都市テーベは、中王国時代（前2100年頃）から古代エジプトの政治および宗教の中心地であった。特に新王国時代（前1550～1069年頃）に最盛期を迎え、当時の国家神であったアメン神の総本山である東岸のカルナク神殿やルクソール神殿の建築活動が活発になった。ナイル川の西岸には、「王家の谷」をはじめとする王や貴族の岩窟墓群や王の葬祭殿群が築かれ、幅約6kmの広大なネクロポリス、つまり死者の町を形成した。テーベは、新王国時代以降も国家神アメン信仰の中心地としてギリシア系の王朝であるプトレマイオス朝時代頃まで発展し、西岸のネクロポリスにも多くの墓が造り続けられた。古代エジプト王朝時代の造墓活動が途絶えた後、コプト時代になるとテーベ西岸の古代の神殿などの遺構のいくつかはキリスト教の修道院となり、修道僧は隠遁生活の場として、古代の岩窟墓を住処とした。しかし、やがて7世紀の中葉にイスラム教が布教されると、生活環境の悪いテーベ西岸の遺跡は人々の記憶から忘れられるようになった。

## 3. ルクソール西岸の古代遺跡とクルナ村

古代テーベのネクロポリスが位置するルクソール西岸は今日クルナ村として知られている。18世紀末のフランスのナポレオンによるエジプト遠征後は、ヨーロッパで薬として売られ



図1 エジプト全図。赤枠のルクソール西岸が本稿で扱う世界遺産の位置である。

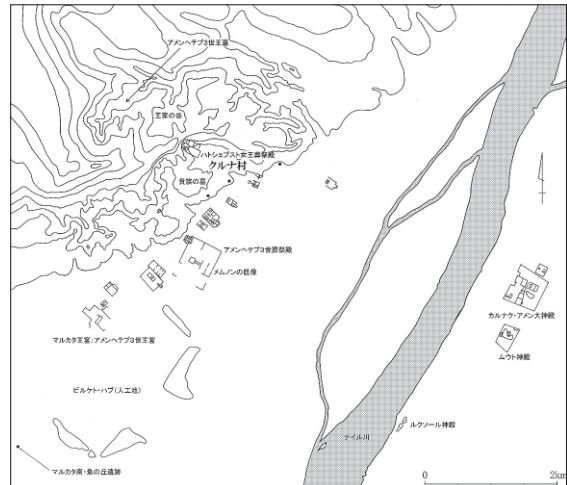


図2 ルクソール遺跡地図



図3 空から見たテーベ・ネクロポリス（住居撤去後）

たミイラや墓の副葬品を盗掘し、不法に売買された歴史がある。古代の遺物が欧米人に高価で売買できることを知った現地の住民は、水の供

給が困難であるにも関わらず、古代の墓を住処とし、盗掘を行うようになった。こうした状況から、ヨーロッパのエジプト学者の中には先入観を持ってクルナ村の住民を盗賊だとみなしてきた研究者もいた。一方で、クルナ村はエジプト学の歴史と密接に関わっていたことも事実である。エジプト学の父と呼ばれる18世紀や19世紀のヨーロッパの研究者は村に居住し、村民たちと生活を営んでいた。たとえば、1798年から1799年のナポレオンのエジプト遠征に随行したヴィヴァン・ドノン<sup>1</sup>は古代の墓に住む村人とのやり取りについて記録している (Denon, 1803, vol. II: 86-97, 196-197; vol. III: 28-32, 47-88)。英国エジプト学の父とされるジョン・ガードナー・ウィルキンソン<sup>2</sup>は、1821年から1833年までクルナ村で暮らしていた。彼の住んだ家にはその後も英国の研究者が滞在し、調査研究活動を続けていた。さらに村民は、外国の考古学者の発掘調査の主要な作業員として重用されてきた。例えば、有名なツタンカーメン王墓を発掘した英国の考古学者ハワード・カーターの発掘調査時の写真を見ると、多くの現地住民が発掘調査の作業員として働いている様子がわかる。発掘調査の作業員の多くは、古代の墓を住居として暮らしていた。ハワード・カーターがツタンカーメン王墓を発見する前の1899年に上エジプトの遺跡局長に任命された時、彼は、当時のエジプト考古局長官であったガストン・マスペロからテーベのネクロポリスの遺跡の保存状態を報告するように命じられ、クルナ村にある古代の墓を盗掘から護るために墓の入口に木製あるいは鉄製の扉の設置を推進した (van der Spek 2011:150)。さらにカーターの後継者であったアーサー・ウェイゴールは、遺跡の保護のために壁画の描かれた岩窟墓に住む住人を移住させた。さらに、次に上エジプトの遺跡局長となったエンゲルバッハは、1912年の遺跡保護法により、古代の墓は政府に帰属するものであり、墓に住む村民を「不法居住者」とみなしている (van der Spek 2011:152)。しかし、2度の世界大戦中は、クルナ村を監視するエジプト考古局の査察官が存在せず、外国の考古学者による発掘調査も継続されなかったことから、古代の墓



図4 墓地の上に並ぶクルナ村の住居

における村民の不法居住は拡大し、古代の墓の上に日乾煉瓦の家屋を建設するまでになり、古代の遺物の盗掘活動も増加した (van der Spek 2011:146-147)。特に1937年から1942年にかけて、クルナ村の住民による盗掘により多くの古代の墓が著しく破壊されたため、エジプト政府は古代の墓地に住む村民の移住を計画した。そのような中で、1947年にエジプト人建築家ハッサン・ファタヒにより「新クルナ村」が建設され、移住が試みられたが、クルナ村の村民の抵抗にあり、失敗に終わってしまった (Fathy 1973)。

#### 4. 世界遺産登録とクルナ村

1979年の第3回世界遺産委員会でルクソールの遺跡は、「古代都市テーベとそのネクロポリス (墓地遺跡)」としてユネスコの87番目の世界文化遺産に登録された<sup>1</sup>。これによりネクロポリスにあるクルナ村の住居は、世界遺産の範囲内に存在することになってしまった。1982年に世界銀行の観光開発部門のコンサルタントの奨励により、1984年に墓地遺跡から離れたクルナ村の北部に「新クルナ村」の建設が開始された。建設の目的は、墓地遺跡のある石灰岩丘陵の人口密度が増加したことと、観光の促進のために墓地遺跡の古代の景観の復元が望まれたからであった。地質調査によっても墓地遺跡のある丘陵の石灰岩の状態が脆弱であり、当該地域に生活する村民の排水により、古代の墓に物理的な

<sup>1</sup> Ancient Thebes and its Necropolis, UNESCO: <http://whc.unesco.org/en/list/87>

被害をもたらすことが明確となった。したがって、長期的に人々が生活することによりもたらされる排水やゴミの廃棄は、当該地域の遺跡の保護に悪影響を及ぼすことになることと認識されたのである。1994年に当時のムバラク大統領によって「新クルナ村」がオープンすると、クルナ村の住民は移住に激しく抵抗した。彼らの多くはエジプト考古最高評議会（現、エジプト考古省）にガード、修復師などとして雇われていたにも関わらず、同時にアラバスターという石材で古代の遺物のレプリカのお土産を作る職人として、あるいはそれらを売るお土産屋を営んで生計を立てていた者が多く（図5、図8）、移住によって観光地である遺跡から離れることによって、彼らの生活に経済的なダメージを負うことになってしまうからであった。

1994年11月に上エジプト一帯を豪雨が襲い、当該地域が壊滅的な影響を受けたことで、住居を失い「新クルナ村」に移住することを余儀なくされた村民がいたが、その後も移住が促進されなかったため、エジプト政府は「新クルナ村」に新たに建設した約1500軒の住居を満たすためにブルドーザー等でクルナ村の住居を撤去し、250世帯を移住させた（Hassan 1997）。さらに、1997年にはクルナ村の中心部に位置するディーラ・アル＝バフリーのハトシェプスト女王葬祭殿にてテロ集団による観光客の襲撃事件が起きたことで、移住への圧力が強化された。そこで、ユネスコの世界遺産委員会は、1998年にクルナ村の村民の移住が滞っていた状況に懸念を示した。ところが、2000年代になると、近現代にテーベのネクロポリスに作り続けられた住居も文化遺産として捉えられ、これらの近現代の住居を含めた文化的景観としてのクルナ村の重要性が認識された<sup>2</sup>。しかし、遺跡内に住民の住居が存在することに問題視した当時のエジプト政府は、2006年よりクルナ村の遺跡内の住居の大規模な撤去を開始した。

クルナ村の住居の撤去が開始されると、外国人や撤去に反対するエジプト人考古学者を中



図5 クルナ村のアラバスター工房と土産店



図6-1 住居撤去前のクルナ村の衛星画像（2002年）



図6-2 住居撤去後のクルナ村の衛星画像（2009年）



図6-3 旧クルナ村と「新クルナ市」

<sup>2</sup> 2001年のユネスコ委員会の勧告は、<http://whc.unesco.org/en/decisions/5890>を参照。

心に村と住民の生活文化の保全のための活動“QURNA DISCOVERY”が開始され、資料館も作られた<sup>3</sup>。また、ユネスコ世界遺産委員会は、クルナ村の実質的な破壊は現代の保存修復の観点から受け入れられないと勧告したが<sup>4</sup>、2010年までに村の大部の住居が撤去され、住民は北部の「新クルナ村」が発展した形態の「新クルナ市」に移住を余儀なくされたのである<sup>5</sup>。Google Earthの人工衛星の画像でも明確にわかるように、この年を境にクルナ村の景観が著しく変わってしまった（図6-1~3）。

## 5. ルクソールの人々の生活と遺跡観光、考古学調査

クルナ村の住民の住居の大規模な撤去によって、テーベ・ネクロポリスのこれまでの社会的景観が失われ、住民のコミュニティも破壊された。古代の遺跡だけが残り、発掘調査を続ける考古学者には都合が良くなったが、クルナ村の住居が撤去され、人々が「新クルナ村」に移住したことにより、過去約200年の間に形成された重層的な文化的景観が消失してしまった（図7）。

2017年1月に筆者が行った現地住民のインタビューでは、新しい住居を与えられて便利になったと喜ぶ者もいれば、子供の頃から慣れ親しんだ昔の家に戻りたいと嘆く者もいた。25年前に初めて会った時、13歳だったカーリッドという名の男性は、今でも昔のクルナ村にあった家の近くで土産屋を営んでいる（図8-1）。「新クルナ市」へ移住する際には政府から王家の谷のヴィジターズ・センターに併設された土産物屋（図9）に店舗をあてがってもらえるとの話だったが、開業させてもらえないため昔の家の近くに戻ってきたという。村の移転は、村そのものの均質化、近代化だけでなく、労働環境の変化ももたらしている。

<sup>3</sup> <http://www.qurna.org/discovery.html>  
現在では、この資料館も撤去されている。

<sup>4</sup> 注2を参照。

<sup>5</sup> 現在では、クルナ村南西部に位置するクルナト・ムライ地区のみに村民の住居が残されている。ただし、村民は居住しておらず、維持管理が課題となっている。



図7 住居撤去後のクルナ村シャイク・アブド・アル＝クルナ地区



図8-1 住居撤去後に元あった場所に造られた土産店（2017年1月撮影）



図8-2 土産物を作る村民（2017年1月撮影）



図8-3 土産店内（2017年1月撮影）



図9 王家の谷のヴィジターズセンターに併設された土産店（2017年1月撮影）

政府が建設したヴィジターズ・センターに併設して土産物屋などが配置され、政府主導で文化資源活用のための整備は進んでいるが、果たして現地住民の生活に還元されているかは大いに疑問である。

## 6. おわりに

ルクソール西岸のテーベ・ネクロポリスは、学術的にも観光資源としても非常に価値の高い古代エジプト王朝時代の遺跡であるが、盗掘、遺物の不法売買、遺跡環境の悪化などの負の歴史があったとは言え、約500年間にわたって営まれたクルナ村とその人々の生活も遺跡の文化的景観の一部である。クルナ村については、もう既に手遅れであるが、テーベ・ネクロポリスの一部として景観をある程度残し、文化資源として活用することは可能だったのではないか。これまで、外国の調査隊としてクルナ村で考古学的発掘調査に関わってきた一人として、村の危機的状況に対し無力であったことに自責の念にかられてしまう。

「新クルナ市」に移住した村民たちは、設備は以前より充実してはいるものの、人工的な街に住まわせられたため、これまでに培ってきた文化的社会的伝統を維持することが困難である。また、文化資源の活用も政府主導となり、地域住民が自発的に活動しにくくなってしまった。今後は、住民自らがいかにして世界遺産を保護し地域振興に活用できるのかを考えていく必要があるだろう。

## 謝辞

筆者は、早稲田大学学部2年生の時よりほぼ毎年ルクソールでの考古学的発掘調査に参加させていただき、今年でちょうど30年目となる。この間クルナ村の住民の生活の著しい変化を目の当たりにしてきた。このような貴重な機会を与えてくださった吉村作治先生（早稲田大学名誉教授・東日本国際大学学長）、近藤二郎先生（早稲田大学教授・早稲田大学エジプト学研究所所長）をはじめとする先生方および先輩方にここに記して感謝する。本稿は、これまで参加した考古学調査の傍ら、時折垣間見たクルナ村とその住民の生活環境の大きな変化に関心を持ち、執筆したものである。最後にシンポジウムの開催にご協力いただいた金沢大学新学術創成研究機構および関係者の方々に感謝申し上げる。

## 参考文献

- Denon, V. 1803 *Travels in Upper and Lower Egypt (In Company with Several Divisions of the French Army, During the Campaigns of General Bonaparte In that Country; and Published with his Immediate Patronage)*. Translated by Arthur Aikin; Volumes I, II, and III. London: Longman and Rees, Paternoster-Row and Richard Phillips.
- Fathy, H. 1978 *Architecture for the Poor: An Experiment in Rural Egypt*. Chicago: University of Chicago Press
- Hassan, N. 1997 "A Village's Right to Live," *Al-Ahram Weekly*, May 8-14.
- Van der Spek, K. 2011 *The Modern Neighbors of Tutankhamun: History, Life, and Work in the Villages of the Theban West Bank*, American University in Cairo Press.